

コンピュータアートセンター コンピュータメディア研究所 設立に関する趣意書

コンピュータはその発生以来、社会との適応関係に於てそのハードウェア及びソフトウェアの両面に於て技術革新をつづけ、現在では社会の中で不可欠なメディアとして、その重要な一端をになうようになって居ります。殊に近年の処理能力、I/O 装置及びシステムとしての発展にはめざましいものがあり、コンピュータの生活面への適応の実現も遠からず予測されるようになって居ります。

ただそのアプリケーションの側面では、本質的な概念、具体的な方法論に於て多くの問題を残し、殊にその精神的、感覚的な側面、最も人間的な領域へのアプリケーションについては、殆んどその研究が始められたばかりとしか云えない状態であります。

現代の社会の新しいメディアとしてのアプローチ

これまでの高密度、高生産、高消費の社会からの離脱にあたって、この物質的な豊かさの保証を持ちながら、その実害を避け、人間的にも精神的にもより豊かな社会を作っていくためには、単なるハードウェア指向の考え方から脱して、人間のいとなみ全体を包括する大きなシステムを考えなければならない時期に来て居るように思われます。

ここに文化の面からこの新しいメディアに対し積極的なアプローチを行い、同時に又、このメディアが文化面に参加することにより、現代の流動的な社会とのより望ましい対応関係を促し、又このメディアを媒体として、技術と文化、社会、経済の相互的な望ましい影響の関係を育て文化から経済までを含んだ大きな生態系としての社会の実現の可能性をそこに開くことが強く望まれて居るように思われます。

芸術とコンピュータの出会い

これまで芸術の分野では、コンピュータ開発のごく初期から積極的なアプローチと研究開発が行なわれて来ました。

アメリカのイリノイ大学におけるヒラー、アイザクソン両教授の研究がその初期のものとして有名であります。その他にもベル電話研究所、スタンフォード大学、コロンビア大学、プリンストン大学、ニューヨウク大学、特に特筆すべき研究が継続されて居ます。

又、我が国でもコンピュータの導入を機会にこの分野へのアプローチは敏感に始められて居ります。

ヒラー教授の例を含めて、初期のコンピュータ技術による創作、芸術の分野での活動は、そのハードウェア、ソフトウェア及びコンセプトの面に於て色々の問題を持って居り、関係者の努力にもかかわらず、十分に成果をあげることが出来ない状況でありましたが、その後、これらの研究の継続的な努力及びハード、ソフトウェアとしてのコンピュータシステムの非常な発達、概念の新たな展開によりこの問題は新しい局面を見せるようになりました。こ

の転換の時期以後をコンピュータアートの第二期とよぶことが出来ると思います。

現代の文化、社会の特性は、その量的拡大と、個別化と云う相反する特徴の同時的な進行という面に非常に強く現れて居ります。

このため、芸術に於ても 1950 年代の後半から各分野の個立した性格が急速にうすれ、包括的な新しい様式が生まれることになりました。学際的、又インターメディア的思考はあきらかにこの時期にその発生の原点を持って居るのでありますが、この社会、文化の変質の特徴の線上にコンピュータメディアは非常に大きな可能性を持ったものとして極めて大きな期待とともにクローズアップされて来るのであります。

諸外国に於ける研究・開発

私は先般、アメリカに於ける最近のコンピュータ技術の文化面への適用の状態を研究するために渡米し、多くの研究機関、作家、団体を訪ね、その研究の成果と創作活動について多くの知識を得て参りました。現在、アメリカの社会に於てはコンピュータメディアは、その日常的、家庭的なアプリケーションの段階に入る直前の状態にあるように思われますが、各研究機関に於ける開発の状態は非常に目覚ましいものがありました。殊に、大小、諸研究所の設備の充実には目を見張るものがあり、我国のこの分野の状態に比較してまことにうらやましい限りでありました。

各大学や、I.B.M 始め、各コンピュータメーカーに於ける研究は当然のことながら、ゼロックス、ベルテレフォン等の企業が文化の形での社会への還元に大きな出資を行って居ることには学ぶべき点があるように思われました。

一方、ヨーロッパに於ては、ロンドンに本部を持つ C.A.S (コンピュータアートソサイエティ) が昨年 8 月エディンバラでイベント、デモンストレーションを含んだコンピュータアート展を開催し、又、各国にあるその支部を通じて活発な活動を行なっています。この他、フランスではバルボー、クセナキス等のパリ大学其他に於ける研究創作が行われ、殊にクセナキスが最近開発したシステムによる新しい音楽作品に期待がよせられて居ます。ドイツではフランケ、ネエス等多くの作家による美術活動が広範に行われて居ます。北欧各国イタリアまで含め保守的と云われるヨーロッパでも思いがけないほど盛んな活動が見られます。

国により、又、人によりコンピュータアートの具体的なリアリゼーションの形は違って居りますが、そこに一貫して見られるのは、コンピュータを芸術に適用すること、及びそのための研究開発は、何の議論もない当然のこととして居る姿勢であります。

このような新しいメディアの発展には、新しい概念とそれを実現するソフトウェア及び技術の開発が不可欠のものであります。これらは新しいメディアとしてのシステムと常時ふれあうことによって始めて生まれ、促され、成長するものであり、作家、研究者の手許に優秀なシステムが置かれて居るアメリカを始めとする各研究所の状態はこのこの意味からも非常に望ましいものであると云うことが出来ます。

我国に於ても芸術、文化の面からこのメディアを通しての社会への貢献は極めて望まれて行くことであり、その開発は不可欠のことではありますが、我国の状態は一部関係者の深い理解にもかかわらず、一般には理想的な状態には程遠いと云わざるを得ません。殊に作家とハードウェア及び技術者との出会いは非常に少なく、それも殆んど偶然に行われて居る状態で、ここから社会に貢献する新しいコンセプト、ソフトウェア、技術の望ましい発展が起り育つ可能性は極めて低いと云わなくてはなりません。

ここに私達がコンピュータアートセンター コンピュータメディア研究所を組織・設立し、これ等の問題の解決をはかり、この分野の発展に資する必要があると強く考えた理由があるのであります。

コンピュータアートセンター コンピュータメディア研究所の意義

このコンピュータアートセンター コンピュータメディア研究所はコンピュータメディアを通して文化と社会経済をむすぶ一つの媒質としての機能を果たすための研究を行うものですが、この目的にとって必要な諸機器、施設を整え、必要な研究者、オペレーター、所員に依ってこの目的を達成して行く機関として、より強力な実行力を持った形で実現、設立をしたいと望んで居ります。

この研究開発はただ芸術の分野に於て消費的、閉鎖的な形で行なわれるものではなく、他の技術、経済の分野への波及効果も極めて大きいものと考えられます。

これまで産業は産業のみ、文化は文化と云う孤立した状態で互いに別々の発展をしてまいりましたが、現代の社会ではこのような分裂した状態では個々の分野の発展すらもはや不可能な状況となって居り、文化の側から技術の発展を促し、技術の発展が更に文化の変質をもたらすと云う相互的な影響に於ける大きな連鎖の成立が最も望ましい形で、現在最も必要とされて居るところのものであります。

社会への波及効果と企業へのメリット

現在すでに開発されて居る技術の水準に於ても、文化への適応は相当に広範に行うことの可能性が見られます。そしてその体系化を行うことは、現代の多くの問題に直面しそれに適応するために大きな変革を迫られて居る産業の構造転換への望ましい影響をもたらすものと考えられます。

具体的な産業へのメリットとしては先ずこれまで計算機、データ処理機としてのハードウェア商品と考えられてきたコンピュータを、より人間的な世界、日常的な生活の場へと、その適用の外延を拡げることにより、新たな消費利用層の開拓を促し、そのソフトウェアの開発と相俟って、これが現時点以後の商業的な分野としても非常に有望なものとなることが考えられます。

周辺機器群に於ては既存の危機の新しい分野への利用と併行して新しい機器群の開発と

商品化と云う形で現れるものと思われます。これは単にコンピュータアートの分野に限らず、私たちの社会、日常的な生活空間の豊かさ、その快適化に著しく貢献するものであり、すでにアメリカでは簡単なものは独立して市販されて居る状態であります。

工作機械についても数値制御の分野では金属材料、アクリル板等に対する精巧なコンピュータ美術の施工、立体 NC 彫刻等、新しい美感のある生活空間の実現に非常に期待されるものがあります。

空間デザイン、商業工業デザインの分野での利用についてはもはや多言を要しないものと思われます。又、シミュレーション等の技術応用によりこれまでの機械的な単純なものとは違った非常に高度な娯楽施設の実現も容易であります。

すでに開発の進んで居る CAI 等も現在直面して居る多くの困難、問題点に対し、人間性の側面からアプローチすることが必要であり、この面での展開も非常に期待されて居るものであります。

其他、デジジョンルームの感覚情報論的な体系化、広告媒体としての開発、音楽（音響）の成生、制御による快適な居住空間、等、多くの分野での適用がすでに開発されつつあります。

この様な形での社会への貢献のためにもこの研究は強く推進されるべきものであります。開発と経済的な利益と云う産業へのダイレクトな還元と同時に、企業からの社会に対する文化の形での貢献が社会を一巡した後はその企業に再びもたらす第二次的なメリットには計りしれないものがあります。

むすび

この様な文化と経済の連携はすでにアメリカでは多くの文化的財団、研究所の形で実現されて居り、我国でも最近この傾向が顕著に現れ始めて居りますのは大変望ましいことでもあります。

これは現代の社会がこのような文化、経済、政治を含んだ大きなエコロジカルな体系としての総体を強く求めて居ることの反映であり、その実現は社会全体に大きなメリットをあたえるものであります。

私達のコンピュータアートセンター コンピュータメディア研究所の設立、及びその活動がこの望ましい展開の一助となることが出来ればこの上ない幸と考え、ここのその設立に諸家のご協力ご援助を心からお願い申し上げます次第であります。